熊本学園大学 外国語学部 第14号
英米学科 GAZETTE

令和元年6月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

堀　正広（教授 / 英語学・文体論・コーパス言語学）

コロケーションという言葉を聞かれたことがあるでしょうか。これは、語と語の自然な結びつきのことを言います。たとえば、「良い」を表す good と nice は、thing との結びつきでは good things や nice things と言うことができます。しかし、news においては the good news と言うことはできても the nice news とは言うことはできません。この場合は、the nice news は、不自然なコロケーションということになります。英語のコロケーションは日本人の学習者には習得が難しいといわれています。このコロケーションの様々な問題について、毎日新聞の週刊英語学習紙 Mainichi Weekly で月2回、「堀先生と学ぶコロケーションの時間」というコーナーで連載しています。執筆しながら改めて言葉の奥深さを感じています。

英語教育研究会便り

3 月 10 日英米学科による第 13 回英語教育研究会が行われました。今回は熊本県立第一高等学校校長（去る 3 月末にて御退職）松山秀峰先生をお迎えし、英語教育における長年の御経験と最新の英語教育事情を伺い、参加した現職教員の卒業生はじめ、英語教育を学ぶ在学生、また大学で外国語教育に携わる教員にとっても大変有意義な時間となりました。御講演の後は卒業生と在学生の交流を行い、卒業生を囲んで貴重な情報を共有しました。

英語教育研究会は今年度より卒業生のネットワークを強化するとともに教育研究・実践報告を充実させるべく、運営委員として英米学科卒業生の平井和仁先生（熊本県立第二高等学校）、新里美香代先生（鹿児島市立錫山小中学校）に加わっていただきます。今後もこのニューズレターで研究会の動向を掲載していく予定です。

（英米学科長・塩入）

卒業生より

中学校外国語科（英語）での ICT を活用した授業改善～主体的・対話的・深い学びに向けた授業実践から

新里 美香代（鹿児島市立錫山小中学校）

本校は、鹿児島市の山間地にある小規模校で、一人１台のタブレット端末を活用して個に応じたきめ細やかな指導を進めている。現在、鹿児島大学大学院との共同研究で、ICTを活用した授業実践と研究を進めている。学習ガイドやタブレット端末の活用、家庭へのタブレット端末持ち帰りにおける家庭学習と授業との連携、遠隔授業等､様々な実践を行った。その内容等について、触れていきたい。

2018年11月に、鹿児島大学教職大学院の学校訪問を受け、生徒のお気に入りの人を紹介する授業を行った。生徒は、家庭にタブレット端末を持ち帰り、お気に入りの人物の写真を撮影し、その写真を使いながらプレゼンテーションを行った。自己モニタリングや相互評価を繰り返しながら練習し、ALTに堂々と紹介することができた。

次に、桜島にある黒神中学校と遠隔授業を行った。小規模校同士において、英語科における生徒のコミュニケーション能力や学びの機会の向上を図ることを目的としている。継続してつなぐことで、生徒への良い刺激となり、学ぶ意欲が向上した。Web会議システムを活用し、自分の考え等を英語で伝えたいという思いが、両校の生徒たちを成長させたと感じている。

今後もさらに、生徒の情報活用能力を高める取組や、英語で情報発信する場の工夫等を行っていきたい。語に対する理解を深めていくであろう。

書籍紹介

寺澤 盾『英語の歴史― 過去から未来への物語』、中公新書、2008 年、780 円＋税

矢冨　弘（講師／英語史・社会言語学）

中学校で英語を学び始め、英語を使いコミュニケーションをとる楽しさと難しさに夢中になったのと同時に、私は常に文法や発音に関して「なぜ？」という疑問を抱き続けてきた。その一つが、疑問文や否定文で現れる助動詞 do である。肯定文（I play tennis.）では使わないにもかかわらず、疑問文（Do you play tennis?）と否定文（I do not play tennis.）では do を使わないといけないというルールに釈然としない思いを抱えてきた。大学でフランス語とドイツ語を学んでからは、この疑問はいっそう強いものとなった。英語と同じヨーロッパ言語で、近縁関係にあるはずのこれらの言語では疑問文でも否定文でも do にあたる文法要素は必要ないのだ。英語の歴史を学ぶことで初めて、この疑問は氷解された。実は英語でも昔は助動詞 do は必要なく、疑問文では主語と動詞の位置を入れ替え、否定文では動詞の後に否定辞 not を付与するだけでよかった。しかし英語では SVO の語順が固定化し、この語順を守るために助動詞 do を採用したのである。

英語学習者が感じる素朴な疑問は、歴史の理解なしに答えることはできない。本書は英語の歴史を過去・現在・未来の一連の物語として魅力的に語りつつ、英語に関する諸相（語彙、発音、文法など）に関する疑問にも答えてくれる。do の他にも、英語にラテン語やフランス語由来の単語が多い理由、know の k が発音されない理由、そして三人称単数動詞に -s 語尾が必要な理由など、読者は物語を読み進めるうちに英語に対する理解を深めていくであろう。

学科ニュース

フレッシュマンキャンプ

岡村　一（教授 / スペイン文学）

昔、あるドイツ人の書いたエッセーを読んだことがある。長く日本の大学で教鞭をとった人だった。毎年、ある学年の同窓会に呼ばれるのだが、それが 40 年も欠かさず続いていて、よくこれだけ友情が続くものだと驚いていた。おそらくその人々にとって、その大学で過ごした日々は人生の宝物だったのだろう。わが英米学科の学生にも、本学での４年間がそのようになればと願わずにいられない。その意味でも、入学直後に実施されるフレッシュマンキャンプは、新入生にとって楽しく、かつ有意義であって欲しいものである。

今年度は４月 13 日と 14 日に実施されたが、参加者が 116 名もあって、十数年前のフレッシュマンキャンプ開始以来の数となった。この人数の多さに加え、今年はとても学生の元気がよく、１日目の互いの親睦、留学生との親睦のための行事なども、いつも以上に盛りあがった。よい仲間作りのできた者が多かったのではないだろうか。２日目には卒業生が５人来て、新入生と懇談してくれた。これは教職についていたり、在学中に留学を経験した OB, OG。できれば、英米学科の学生に人気のある航空業界や金融関係などで働いている卒業生にも来て欲しいところだったが、皆それぞれ仕事の都合があり、今回は無理だった。しかしそれでも、来てくれた５人は、あとで、新入生たちの目が輝いていたと、少し興奮気味に感想を漏らしていた。今年のフレッシュマンキャンプは例年以上に成功だったと思っている。

きみと未来をつなげる
クマガク

編集人　塩入　すみ（英米学科長）
〒862-8680　熊本市中央区大江 2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）　Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp